

## J・ロンドンの極北もの短篇群を読む

辻井 榮 滋

### I

J・ロンドン（1876-1916）は、自らの生活体験を生きのよい素材にしながら数々の長篇・短篇・ルポルタージュ・エッセイ等を書き残していった。1897年7月半ば、すなわち、21歳までにも、そうした体験を積んでいなかったわけではない。むしろ、かなりの体験をすでにたくわえていた。それは、彼の年譜に明らかである。さらにそれらの体験も、ささやかなものではあれ、いくつか文章化されてさえた。<sup>1)</sup>

だが、1897-8年のまる1年がロンドンの作家人生を決定づけるものとなったことは、疑うべくもない。職業作家としての原動力——出発点となる1年間なのであった。

時代は折しも19世紀末。アメリカでは、有名な1893年の恐慌（半年間に8,000の企業が倒産）をはじめとする波状的な不景気に見舞われていた。わがロンドンも、定職には就くことができず、半端仕事で食いつなぐ暮らしに甘んじていた。……

そんな頃汽船『エクセルシア』号がサンフランシスコに入港したのは、1897年7月14日のことであった。当時の狂気の様子をR・キングマンは次のように記している。

クロンダイクからもどって来たばかりのだらしない身なりの男たちが、黄金の財宝を携えて上陸した。わずか数時間のうちに、合衆国をはじめ世界中がクロンダイクの金の発見の事を知った。数日のうちに、クロンダイク・ゴールド・ラッシュは狂気の沙汰となった。行ける者は、職をほうり出して北へ向かった。行けない者は、行ける者に対し発見した利益の分けまえをもらうことを条件に金品を与えた。国を挙げての狂気の沙汰であった。考えも理由もなく、人々が何千人となく狂気——「クロンダイク病」といくつかの新聞が呼んだ——に駆られたのである。<sup>2)</sup>

同じようなパニックが、シアトルでも起こった。『エクセルシア』号入港のわずか3日後のことで、今度は汽船『ポートランド』号入港の報が入った<sup>3)</sup>のである。あとはもう、黄金に憑かれた人々の、現地クロンダイクへの殺到しかなかった。経済不調に光明を見いだせない時代状況と、長年月にわたって育まれてきた人間の<sup>ゴールド</sup>金への飽くなき渴望——攫千金願望——とが、ここで一気に手を取りあう格好でのゴールド・ラッシュと相成ったのである。ニュースは、数時間のう

ちにアメリカやカナダその他を駆けめぐり、何千何万人ものゴールド・ハンターたちが極北の地を目指すこととなった。

弱冠21歳のロンドンも、例外ではなかった。大変な苦学の末にせっかく入ったカリフォルニア大学も、主に経済的理由によりわずか1学期間で退学。その後、ベルモント・アカデミーのクリーニング屋に仕事の口を見つけたものの、いつしか「牛馬のごとく働いており、労働時間は馬よりも長く、考え事をしないことにかけてはほとんど馬同然<sup>4)</sup>」の生活（この時の苦闘は、傑作『マーティン・イーデン』にきわめてリアルに描きこまれている）を送っていた。上記の一大ニュースが入ったのは、クリーニング屋での地獄のような生活が6月で学院も夏休みに入り、その仕事を辞めて間もない頃のことであった。

のちの職業作家としてのロンドンを考えれば、これまた多くのネタをたくわえさせてくれる期間であったことは間違いないが、いずれにせよまったく<sup>うだつ</sup>税の上から甘んじていたロンドンがこの報に飛びついたのは言うまでもない。借金をして旅支度を整え、義姉イライザの夫シェパードとともに、1897年7月25日に汽船『ユーマティラ』号に乗りこんだ。R・キングマンの伝記（p.70, 拙訳書 p.125）を見れば、埠頭を埋め尽くした大群衆の熱気が伝わってきて、当時のいわゆる「クロンダイク病」なるものの理解の大きな一助になるだろう。

さてここで、ロンドンが辿ったクロンダイク往復の旅程を、いくつかの資料をもとに整理しておきたい。

1897年7月25日 汽船『ユーマティラ』号でサンフランシスコ出発（290人乗りに471人が乗船）。途中ポート・タウンゼンドで、『シティ・オブ・トピーカ』号に乗りかえる。

8. 2. アラスカのジューノウ着。
8. 5. ジューノウ発。
8. 7. ダイエイ着。
8. 14. シェパード、リウマチがひどく旅を断念、帰途に。
8. 21. シープ・キャンプ着。雨でぬかむる間道を踏破。
8. 31. チルクート峠登頂。  
ハビイ・キャンプ→ロング・レイク。
9. 8. リンダーマン湖着。2艘の舟作り。『ユーコン・ベル』号および『ベル・オブ・ユーコン』号と命名。
9. 21. リンダーマン湖発。
9. 22. ベネット湖横断。
9. 23. タギッシュ湖からマーシュ湖へ。
9. 24. マーシュ湖からルイス川へ。
9. 25. ボックス・キャニオン着。
9. 26. ホワイト・ホース急流。
9. 29. ル・バージュ湖着。
10. 2. サーティ・マイル川に入る。
10. 3. ビッグ・サモン川。
10. 4. リトル・サモン川。
10. 5. ファイヴ・フィンガー急流（リトル・サモン川との分岐点）。

10. 9. スチューアート川の河口のスプリット=アップ・アイランド着（ドースンまで約80マイル）
10. 16. ドースンに向けて出発。
10. 18. ドースン市着（ここでルイス&マーシャル・ボンズ兄弟と出会う）。同市に6週間滞在。
12. 3. 友人とともにドースンをあとにする。
12. 7. スプリット=アップ・アイランド着。
1898. 1. 27. 山小屋でひと冬を過ごす。「ヘンダースン・クリークの小屋の、後方の壁の上の寝棚の上の丸太に「ジャック・ロンドン。鉱夫/作家、1898年1月27日」と記す。
- 5月 壊血病にやられる。
- 5月末か6月初め ドースン市へ。約3週間滞在。
6. 8. 他の2人とともにドースンを離れ、ユーコン川を1,700マイル（3週間）の旅（この間、たびたび蚊の大群に悩まされる）。
6. 11. ポーキュバイン川との合流点。
6. 16. ヌーラートウ着。
6. 18. アラスカのアンヴィック着。壊血病、相当悪化。
6. 19. ホウリー・クロス・ミッション着。
6. 28. セント・マイクル着。 〈傍点筆者〉

そうしてわずか5ドル足らずの<sup>ゴールド</sup>金を手にしてオークランドに帰着したのは、7月末か8月初旬の頃のことであった。

月日と場所および簡単な事実メモのみにとどめたが、一攫千金を夢見る何千何万人もの<sup>もろ</sup>猛者連にまじって極北にまる1年をかけた若きロンドンの生きざまや彼の作品中の登場人物およびいくつかのキーワード等が垣間見えてはくる。結果的に<sup>ゴールド</sup>金そのものは持ち帰れなかったに等しかったものの、E・S・リサードレリが言うように、まさに“Gold did not line his pockets. But golden ideas filled his mind.”<sup>6)</sup>であった。事実このクロンダイク体験から、12冊の著書と50篇に及ぶ<sup>7)</sup>短篇が生みだされることになったわけだから。

ところで、カナダやアメリカ本土からクロンダイク地方を目指すには、当時3通りのルートがあった。1つは、上に見たロンドンもとった最もポピュラーなコースである。難所が多く、多くの者が命を落したり挫折を余儀なくされた。

…現在のジュノーの近くのスカグウェイというところには、たちまち港ができ、そこからチルクート峠（1,300メートル）を越えて、クロンダイクに歩いて行った黄金亡者の数はおよそ3万5千人、チルクート峠の断崖から墜落した人が約300人、荷物を背負ったまま墜死した馬が千数百頭あったという。<sup>8)</sup>

との記述も見られるほどである。もう1つは、ロンドンが復路に辿ったのとはちょうど逆の、ベーリング海側からユーコン川をさかのぼってドースンに至るコースである。そして3つめは、カナダはブリティッシュ・コロンビア州のエドモントンを立て、アサバスカ湖→グレイト・スレイヴ湖→マッケンジー川→ポーキュバイン川→ユーコン川との合流点→ドースンと辿るコースだが、こちらはそれほどポピュラーではなかった。

これら3つのコースと、そこに殺到した黄金亡者たち自身の生きざまは言うまでもなく、彼らから聞いた数々の話をメモに残し、それらのメモが彼の砂金や金塊となった。

He met American Indians, Northwest Mounted Police, travelers from all over the world. He learned about gold mining, about traveling by dog-team, about the dreary Yukon winter, about the bitter cold, about brave men and women and animals, and about the “white silence” — awesome spectacle of snow and ice from horizon to horizon.<sup>10)</sup>

と、D・ダイアーも記している。具体的にこれらのコースを作品に利用した例を2、3挙げると、第1のコースは「千ダース」(“The One Thousand Dozen,” p. 83, p. 90, p. 98) に詳しいし、第2のコースは「極北の地にて」(“In a Far Country,” pp. 11-19) や、一部「生命にしがみついて」(“Love of Life”) にも描きこまれている。

いずれにしても、ロンドンがこのクロンダイク体験から学びとったことの意義は、計り知れないほど大きかった。帰郷後もしばらくは半端仕事で食いつなぎ、すでに山小屋での冬ごもり中に決意表明していた通り、職業作家への苦難の道を歩みつづけ、その年の晩秋(11月)になってようやく原稿が採用されはじめた。「凍結を旅する者のために」(“To the Man on Trail”) や「千度も死」(“A Thousand Deaths”) などである。そして、1899年1月の「凍路を旅する者のために」を皮切りに、次々と短篇が雑誌に掲載されていった。……

## II

ロンドンの極北ものを読み進めると、それらにはいくつかの重要なキーワードが見えてくる。そこで本章では、筆者が共訳で出した短篇集『極北の地にて』所収の7篇の代表的な作品を中心に、さらには他の10篇余りの短篇にも目を通したうえで、それらのキーワードを拾いあげ、検討を加えてみることにしたい。

まずは、ほとんどの短篇に共通して現われるのが、極北の地のきびしい気象や気候にかかわるもので、cold, silence, darkness といった語およびそれにまつわる表現である。何万人ものゴールド・ハンターたちの前にこの厳寒・沈黙／孤独・暗闇等が立ちはだかったのだから、それらはまさに驚愕の極みであったに違いない。殊に温暖なカリフォルニアあたりから殺到した者たちにしてみれば、なおさら恐怖そのものであっただろう。不慮の事故や災難に遭って、落命したり負傷した者も数えきれなかった。そんな劣悪な条件下でつねに死と背中合わせであったとなれば、無能者は即敗残者であることを受けいれねばならなかった。「極地の地にて」を見てみよう。

このすべてに、あらたな困難が加わった——極北の地の恐怖である。この恐怖は、恐るべき寒さと、恐るべき静寂とのあいだに生まれた子供で、太陽が南の地平線に沈んだ12月、その暗闇のなかで誕生した。(p. 24)

極地のすべてのものに、人を圧倒するような力がある。生命と運動の欠如、暗闇、この地に垂れこめる

無限の静寂。この世のものとも思われぬ沈黙。人の鼓動の一拍一拍を神への冒瀆と思わせる沈黙。（p. 25）

カスファートは、死者たちに囲まれて、死そのものと生きていた。自分の存在の小ささに気づいて怖じけづき、悠々たる時間の静かな支配力にただ圧倒されていた。すべての物事の巨大さに驚愕した。自分以外のものが、すべて最大級だったのだ。たとえば、風や運動の完全な停止、雪におおわれた荒野の広大さ、空の高さと沈黙の深さ。あの風見鶏、あれがほんのちよつとでも動いてくれたら！ 稲妻が走るとか、森が炎で燃えあがるのもいい。天が巻き物のようにめくるとか、最後の審判の日の混乱でもいい。何でもいい。とにかく何か起きてくれ。だが、もちろん1つとして動くものはなかった。沈黙が密度を増し、極北の地の恐怖が、氷のように冷たい指で彼の心に触れた。（p. 27）

死の静寂が、あたりを包んでいる。ほかの気候帯なら、自然がこのような様相を呈したとき、何かを期待してもいいような気配が、わずかでも現われる。かすかな声が出て、とぎれた旋律を続けてくれるのではないかといった気配が。ところが、極北の地では、そんなことはあり得ない。2人の男は、この不気味な静けさのなかで、永遠とも思われた時を過ごしてきたのだ。過去の歌も思いだせなかったし、未来の歌を思い浮かべることもできなかった。この世のものとも思われぬこの沈黙は、太古の昔から、絶対的沈黙であったのだ。（p. 31）

これなどほんの数例にすぎないし、たまたまいずれも「極北の地にて」の描写だが、それにしても何という恐怖であろう。寒さの恐怖・沈黙／孤独の恐怖・暗闇の恐怖が、いかにも現地をつぶさに見た者の自信からくるきわめて的確な表現を駆使して、過不足なく描かれている。読者は、目のあたりに見るような光景の描写に引きずりこまれる。無論こうした例は、「極北の地にて」に限らず、他の多くの短篇にも綺羅星のごとく点在する。「生の掟」（“The Law of Life”）においては、死にゆく老人と彼を取り巻く静寂とさまざまな音から成る世界が不気味な広がりを見せている。さらには、ロンドンの極北ものなかでも最も優れた短篇の1つと言える「生命にしがみついで」には、

小山にはい上がって、景色を見わたした。木々もなければ、茂みもなく、あるものといえば灰色の苔の海ばかりで、灰色の岩や灰色の小湖水や灰色の小川ではろくに変化もなかった。空も灰色だ。太陽はおろか、その気配も見えない。（p. 124）

といったほとんど無変化の、全体が灰色の、「木も、茂みも、草もない——ただただとてつもなく恐ろしい荒涼とした大地が」（p. 119）広がるばかりである。

寒さは、具体的な数値によっても示される。古典的名作とも言える「焚き火」（“To Build a Fire”）を見てみよう。

…男は試しに唾を吐いてみた。鋭いパチッという破裂音がして、彼ははっとする。もう一度吐いてみる。するとまた、雪まで落ちないうちに、唾はパチッという。男は、零下50度では唾が雪の上に落ちてパチッと鳴るのを知ってはいたが、今のは空中で鳴ったのだ。たしかに、零下50度よりも寒い——どれぐらい寒いのか、男にはわからない。（p. 180）

ほどの途方もない寒さなのだ。「ジーズ・アックの物語」（“The Story of Jeess Uck”）には零下40度ないし50度あるいは70度以上、「千ダース」には零下60度（p.103）などほかにも、具体的な気温が散見できる。われわれのように比較的温暖な地に暮らす者にとっては、およそ想像もつかない数値ではある。何しろ、「北方のオデッセー」（“The Odyssey of the North”）にもあるように、「とても暖かかった——何とか零下10度にはなっていたろうか——人々は気にもとめなかった」（傍点引用者）<sup>11)</sup>というのだから、まったく「神の見捨てた地の果て」<sup>12)</sup>なのである。

沈黙については、「白い沈黙」という表現が用いられる。同名の短篇（“The White Silence”）の中でそれが説明されている。

午後が過ぎていった。白い沈黙から生まれる畏敬の念を抱いて、声なき旅行者たちは懸命に歩を進めていた。自然はあまたの企みを用いて、人間に人間の果敢さを自覚させる。それは、止まることのない潮の満干であり、荒れ狂う嵐であり、地震の衝激であり、雷電の長い轟きである。しかし最も凄まじく、われわれを茫然自失させるものは、白い沈黙のもたらす無抵抗の相である。すべての運動は停止し、空は晴れ、九天は真鍮の如き相貌を呈する。どんなに微かな囁きも冒瀆に思われ、人間は憶病になり、自分の声に恐れ戦く。茫々たる不気味な死の世界を旅する唯一の生命のしみである人間は、自分の大胆さに身を震わせ、自分の生命が蛆の生命であり、ただそれだけであると悟るのである。<sup>13)</sup>

また暗闇については、太陽の位置的確な描出の仕方にみごとに表われている。

この時が、ちょうど正午だった。急いでふり返ると、<sup>14)</sup>黄金色の弧が、雪をかぶった山の肩の上から、ほんの少しのぞきこんでいる。それは一瞬ほほ笑み、そして姿を消した。（「極北の地にて」、p.32）

きっかり正午だった。太陽は南方の水平線より上にその縁を上げないまま、天空に火の気配を投げかけると、素早くそれを取り去ってしまった。<sup>14)</sup>（「白い沈黙」）

空には雲1つないのに、太陽はおろかその気配も見えない。晴れわたった朝なのだ。それでいながら、ぼんやりとした帳<sup>とばり</sup>があたりの表面をおおっているようで、いわく言いがたい陰気さのために、朝が暗いものになっていた。それは、日が射さないからだ。こんな事実を男が気にすることはなかった。太陽のないことに慣れてきたからだ。もう何日も太陽を見ていなかったし、あと数日しないと、あの気持ちを引き立てるような球体が真南の地平線上にちょこっと顔をのぞかせはせず、それも、瞬く間に沈んで見えなくなってしまうことを知っていた。（「焚き火」、p.178）

と、極地体験をした者が知る説得力ある表現になっている。「極北の地を旅したことの無い者には、とうてい理解しがたいこと」（p.33）や「極北の地を旅したことがある者にしか、この苦痛はわかるまい」（p.99）の通り、確信に裏打ちされたものだ。ついでながら、オーロラの描写についても同じことが言える。

北極光が空に顫動する色彩の饗宴をえがき出した。凍てついた輝きの、薔薇色の波が天頂へとのび広がり、緑をおびた白色の、きらきらした大きな縞が星の光をかき消し、さながら巨人の手が極地の空に堂々たるアーチをささげるに似ていた。（「オーロラの娘」）<sup>15)</sup>

と、まことに臨場感あふれるものである。

ロンドンが21歳の目と耳と肌で見聞き感じとった極北の寒さ・静寂／沈黙／孤独・暗闇とは、このようなものであった。それは太古の昔から存続してきたものなのだが、こうした「絶対的沈黙」や零下50～60度の気温等に、われわれ現代文明人は果たしてどれだけ耐え得るのだろうか？ 通常、快適と感じる気温はセ氏18度である。30度以上の真夏日は不快と感じるわけだから、せいぜい18度の上下10度程度、すなわち、わずか20度前後というのが何とか暮らしてゆける温度幅であろうか。もっとも、ロシアあたりになると零下10度までぐらいなら良しだそうだし、カリフォルニア州の州都サクラメントの夏だと乾燥しているので40度でもまずまずのようだから、仮にそこまでも許容範囲としても、人間がさほど苦痛を伴わずに暮らしてゆける温度幅は、それでもせいぜい50度ほどということになるだろうか。だが、極北の地にあつて人間が生き長らえるためには、それなりの手立てを講じなければならない。知恵や想像力の問題が浮上する所以である。複数の人間の場合はまだしも、単独行動の場合にはつねに死が見え隠れする。その顕著な例が、「焚き火」の主人公である。

この男の難点は、想像力のないことだった。日常生活一般では敏捷で抜け目がなかったが、それは物事のうわべだけのことであつて、意味のあることについてはそうではなかったのだ。零下50度といえば、氷点下80何度ということだ。そうした事実にしても、この男には寒くて不快と感じる、それだけのことだった。気温に左右される生き物としての自分のもろさや、ある限られた暑さ寒さの範囲内でしか生きられない人間のもろさ全般についてまで、考えの及ぶことはなかった（p.179）〈傍線引用者〉

ことが災いして、事もあろうに大雪の積もったえぞ松の木の真下で<sup>おこ</sup>熾してしまつたために、自分の命を救ってくれるはずの焚き火が消えてしまい、そのためにやがて命を落とす破目に陥つてしまう。彼の所持する数少ない文明の利器であるマッチも鞘ナイフも、一向に役立ちはしない。そういえば、単行本に収録されずに終わったものの、*Harper's Bazar* という雑誌の1900年9月15日号に掲載された「クロンダイクにおける家事」という記事で、ロンドンは

The cold, the silence, and the darkness somehow seem to be considered the chief woes of the Klondike. 〈下線引用者〉<sup>16)</sup>

とも書いていた。

第2点めとしては、時・時間・時計にかかわる問題がある。大枠としては、すでに「暗闇」のところで取りあげたように、太陽の位置や高さによって1日のおおよその時間や季節の移り変わりを知る術が<sup>すべ</sup>あり、極北の大自然にあつてはむしろそれで十分に事足りる。ところが人類は、時計を<sup>すべ</sup>発明した。原始時計の類いは古代オリエントにまでさかのぼるが、われわれ現代文明人ともなると、分・秒単位の生活に追われる毎日を送っていると言っても過言ではない。作家の中野孝次が、こんなことを書いている。

都会では分刻みのスケジュールにしばられ、情報と時間に追われ、心は空っぽで、外なる物と対応す

ることで1日が過ぎてゆく。時間も自己も細分化されている。それでは真の自己を取り戻すことなど出来るわけもなく、一生はラチもないことでの奔走の中に終る。

真の自己を取り戻すには、もう一度<sup>17)</sup>そういう細分化された生活を捨て、自然の中へ、宇宙の根源へ戻らねばならない。

と。金鉱さがしの連中がクロナダイクに殺到し、大自然のきびしさをまざまざと思い知ったまではよかったが、そこへ彼らは時計とともに細分化された時間までも持ちこんだ。そのことが相矛盾をきたし、あまり意味のあることではないということに気づかない——相変わらず細かい時間にとらわれてやまない——登場人物としてロンドンの作品に描かれている。「極北の地にて」にはすでに「悠々たる時間の静かな支配力」(p.27)を見たが、「生命にしがみついて」には

男は時計を出してみたが、そのあいだにも体重を片脚にかけていた。4時だ。季節は7月の末近くか8月の初めなので——彼には正確な日付がここ1、2週間わからなくなっていた、——太陽がおよそ北西を指しているのはわかっていた。(p.118)

それから、湯気の沸き立っている鍋の湯を飲み、時計のネジを巻き、毛布のあいだにはい込んだ。(p.123)

とあり、以下にも3カ所にわたって、

最後にしたのは、マッチの乾いているのを確かめることと、時計のネジを巻くことだった。(p.129)

長いあいだ動かなかつたが、やがて横向きに寝がえりを打つと、時計のネジを巻き、朝までそこに横になっていた。(p.134)

男は時計を見る。11時を指していて、まだ動いている。どうやらネジを巻きつづけていたようだ。(p.141)

というふうに、意識的・無意識的に時計に呪縛されている。この悠々たる時の流れのなかではまったく不必要かつ無意味な行為であるにもかかわらず、なのである。明らかに、現代文明人が時間にとらわれすぎてしまっていることの証左であろう。そういえば「焚き火」は、ある意味において、主人公の男が時間や時計にとらわれすぎたために起こった悲劇であろう。「6時には仲間たちに合流したい」(p.189)とのあせりにも近い願望が、男に時計を見て9時であることを確認させることから始まるこの短篇は、以後零下75度もの極寒との孤独な闘いに現代文明人的時間を絡ませた一種サーキャスティックなストーリーとなっているからである。

これがヘンダースン・クリークで、彼はあの分岐点から10マイルのところまで来ているのを知った。時計を見てみる。10時だ。時速4マイルで来たわけだから、この調子で行くと12時半には分岐点に着くだろう。(p.183)



そして、「自分のペースの時速4マイルの足どり」(p.185)を守りながら、「12時半、1分と狂わずきっかりに、男はクリークの分岐点に着」(p.186)く。今日のわれわれが通勤によって1分と狂わず目的地へと運ばれるリズムとまさに軌を一にするものである。だが、通常は1分と狂わない文明の利器でさえ、思わぬ事故——地震、濃霧、飛びこみ、大雨、台風、ポイント故障等々——による延着もあり得るわけで、ましてこうした予断を許さない状況下にある男が立てた所要時間の計算に狂いが生じたとしても不思議はない。時計や時間を気かけながら極北の大自然のなかで苦闘する男の姿は、何とも滑稽であり、皮肉であり、悲劇でもある。さらにもう1篇の「千ダース」では、同じ計算でも「卵をめぐる冒険」(p.82)である。極北の地に馳せ参じる<sup>ゴールド</sup>金目あての連中とは違い、主人公ラスムンゼンは「ドースンでの食料不足」(p.104)を当てこんでの卵売りに賭ける。あとは、あらゆる計算のオン・パレードである。ところが、物事は計算通りには進まない。結末は、卵がすべて腐っていて、主人公は首を吊って果てる。いかに緻密な計算をしようと、事はその通りに運ばない場合が往々にしてあるものだ。本章では、時間——時計あるいは計算に絞って考察してみたが、極北ものも含め他のジャンルの短篇の数値表現まで取りあげた興味深い研究発表もある。

最後に、その他のキーワードをまとめていくつか拾っておこう。

ロンドンの極北ものには、いわゆる土地のインディアンがたびたび登場する。そして彼らは、金や毛皮を求めてやって来た白人たちとの接触を通じて、さまざまなトラブルに巻き込まれたり友好関係を樹立したりもする。数多くの登場人物のなかに、それほど多くはないが、“shaman”（「シャーマン；まじない師」、あるいは「魔術」といった表現も）が顔をのぞかせる。すなわち、「ある種の部族社会で神々や霊界との媒介役；病魔退散の祈禱や予言を行う」<sup>19)</sup>人物である。「生の掟」(p.41)、「老人たちの結束」(“The League of the Old Men,” p.74, p.75) , あるいは「ポーポツクの知恵」(“The Wit of Porportuk”)などにそれらが見える。「キーシュの物語」(“The Story of Keesh”)には「魔術」という言葉が何度も現われる。「恥さらし」(“Lost Face”)においては主人公のスビエンコフが、幕切れまでシャーマン的存在であり続ける。科学万能の現代文明世界ではとかく疎んじられたり軽視されたりしがちだが、部族社会における彼らの存在と役割の意義を作者が把握していたことの証であろう。(ちなみに、ロンドンがクロンダイクに赴いた時から100年以上も経過した今日の最先端の西洋医学でさえ、“traditional healer”や“tribal ceremony”<sup>20)</sup>によって病人が癒される効用を認めている。)

今1つは、キーワードと呼べるものではないかも知れないが、駆け引きあるいは取り引きをめぐる緊迫した場面がロンドンの短篇には数多く見られる点である。それらは、すでに取りあげたポイントとともに相まってかなり大きなウェイトを占めている。文明生活にどっぷりと浸りきっているのとはおよそ異なる環境下の、しかも見ず知らずの黄金亡者たちがひしめきあう極北の地とあれば、さまざまな駆け引きや取り引きがあったことは想像に難くない。ましてロンドンが、冬ごもりの山小屋その他でそうした話を山と聞いたのである。「キーシュの物語」の冒頭にも、そのことがずばり述べられている。

暗い冬、激しい北の疾風が氷の上をどこまでも吹き荒れ、空が舞いおりる白いもので一杯になり、誰も外に出てゆかなくなる頃こそ、ちょうど、キーシュがどんなにして村で一番貧しい小屋から身を起し、

皆の上に立つ偉い人物になったかという話をするにはふさわしい時なのである。<sup>21)</sup>

駆け引きが物語の重要な軸を成しているものの代表といえば、「恥さらし」であろう。自分がさんざん痛めつけたヌーラトウ・インディアンたちに、今度は拷問のうえに殺害されようとしている場面である。拷問に耐えることの苦痛を嫌って、主人公は一か八かの駆け引きに出る。「俺には死ぬ気はないぜ。俺は偉い人間なんだから、……」<sup>22)</sup>に始まる大一番は、まるで息詰まる芝居か映画でも見るような迫力に富んだ場面であり、この駆け引きこそがそのまま結末まで一気に読者を引っぱってゆく。無論、「駆け引き」(‘game’)や「取り引き」(‘bargain’)といった語も目に留まる。

紙数の関係で「恥さらし」のみを例にあげたが、当然他の多くの作品でも形を変えて数々の「駆け引き」や「取り引き」が行なわれる。「ポーポーツクの知恵」はまさにそうしたやり取り自体がストーリーの醍醐味となっているし、「千ダース」にもいくつもの駆け引きが見られる。真の金鉱発見に至らなかった者たちも、また違ったそれぞれの「金鉱」狙いを駆け引きしあいながら演じてみせるのである。主人公ラスムンゼンのように卵をめぐる駆け引きもあれば、インディアンの人夫やその他の荷物の運搬をめぐる取り引き、スウェーデン人の舟作りや2人の新聞記者との駆け引き等々、あるいは「冬との必死のレース」(p.92)までも同じ範疇に入るだろう。この作品自体が、いわば「駆け引き」をベースに成り立っていると断言してもいいほどだ。その他「オーロラの娘」(“A Daughter of the Aurora”)や「マーカス・オブライエンの行方」(“The Passing of Marcus O’Brien”)にしても、駆け引きや取り引きを主題とする物語である。

### III

今、ロンドンの極北もの短篇群によく現われるキーワードをいくつか取りあげ、それらがストーリーの展開に実に効果的に組みこまれ、いかにもロンドン固有の極北ものと首肯させる特徴になっているかを考察した。

本章では、それらのキーワードがちりばめられた極北もの短篇群のなかでも、さまざまに写しとられた人間模様——とりわけ窮地に追いこまれた生の有りよう——および極北ものにも垣間見える文明批評までも読みとってみたい。

極北の地は、すべてが度はずれである。われわれの住む文明社会生活の一端が、「極北の地にて」に次のように描かれている。

ついこのあいだまで住んでいた世界、国々の忙しい営みと大規模な商業活動にみちた世界は、ひどく遠く感じられる。記憶がときどきよみがえる。市場、美術展、人のあふれた大通り、イヴニングドレス、社交パーティ、知りあいだった紳士、淑女たち。そういったものについての記憶だ。しかし、それは何世紀も前に、別の惑星でおくった人生の記憶のようにぼんやりとしていた。(p.26)

このようにきらびやかな文明の名のもとに仮の(一時的?)庇護を受けるわれわれの社会生活が

美化され誇張されればされるほど、ロンドンの描く力感あふれる極北の世界は遠のいてしまう。両者は、相容れないもの同士だからだ。だがロンドンにしても、文明社会を脱してこの極北の地に賭けた。大多数のゴールド・ハンターたちは単なる黄金亡者にすぎず、しかもその大半は、所期の目的を達することもなく負け犬同然の身に甘んじた。ここまでに限れば、ロンドン自身も彼らとさほど大差はなかった。だが彼は、すでに見たように、かの地で得たさまざまな体験のみならず数多くの実話・噂話を仕入れ、それらをメモに残すことで別の大鉱床（原稿料・印税）を手に入れることとなった。彼の書き残した作品には、文明世界に暮らすわれわれには到底思いも寄らないような信じがたい別世界が展開する。金の発見とそれに続くラッシュは、クロンダイクに限らずいつの時代・場合にも人を変えてしまうだろうが、それが極北の地ともなれば、その度合いは他地域の比ではない。ロンドンの筆力は、当時のクロンダイクの顔——正確に言えばクロンダイク地方の大自然の猛威と、そこで発見された金をめぐってくり広げられた人間たちのあいだの葛藤、対立、殺人、死等々——を鮮烈に写しとった。それは、人間ばかりか他の多くの生き物たちまでも巻きこんだ悲喜劇の数々であった。さらに重要なのは、文明人であったロンドンが意識するとしなやかかわらず文明との対比関係で極北の大自然を背景にそこに蠢く人間や生き物たちを浮き彫りにした点であろう。

さまざまな人間模様と書いたが、まさに十人十色である。登場人物のあり方1つとっても、たとえば「極北の地にて」のウェザービーとカスファートの場合など、「2人しかいない仲間が、頼れるのは相手だけしかいないようなところでけんかを始めてしま」（p.20）い、それがそのまま尾を引きつづけ、結局は2人とも命を絶ってしまう意表をつくような悲劇がある。また、「生命にしがみついて」のように最初は2人いたのが、まもなく1人だけとなって凄絶なサヴァイヴァルに立ち向かってゆく場合、さらには「焚き火」のように作品全体を通じて1人の登場人物が悪戦苦闘する場合等々いろいろである。

ここでは、「生命にしがみついて」を中心に考察してみたい。ゴールド・ラッシュに加わった者たちのほとんどがいかに苦戦に次ぐ苦戦を強いられたかは、先のキーワードや表現からも見当はつくが、この作品の主人公ほど止めどなく押し寄せる試練を死にもの狂いに克服し、あげくの果てに捕鯨船『ベッドフォード』号に救助されるという、苛烈きわまる体験ののちに生還する登場人物も珍しい。「焚き火」の主人公も、同じくさまざまな試練にさらされるが、結末は「きびしい寒さとの闘いに負け」（pp.202-3）、「凍死というのは、人が考えるほど悪いもんじゃないな。はるかにひどい死に方だってあるんだから」（p.203）と悟りながら、「それまで味わったことのない気持ちのよい得心のゆく眠りと思えるものとうとうと陥」（p.204）り、いわば安らかに死の眠りにつく。その死は、たしかに悲劇には違いない。が、「生命にしがみついて」の主人公の生還までのプロセスと比べ、果たしてどちらがより悲惨と言えるであろうか。

「焚き火」の主人公の敵は、煎じ詰めれば零下75度（p.181）という極寒にほぼ限られる。それに対し「生命にしがみついて」の主人公の敵は、これでもかこれでもかと言わんばかりに次から次へと現われる。（両主人公に共通する点といえば名前が与えられていないことだが、それは、生死を賭した極限状況下に置かれたとき、人間はいかなる本性を露呈するかを如実に物語ることにウェイトがあるのであって、名前を特定するまでもなく誰にでも起こり得ることを示唆している。）そして、いわゆるクロンダイクものに特有の黄金亡者たちが見せる醜い人間の強欲も、きちんと描きこまれている。

「ずんぐりとした大鹿の皮袋」(p. 125)という表現は象徴的であり、効果的に5カ所にわたって散見される。主人公は、足を痛めているにもかかわらず、最初のうちはその皮袋を持っていく。だが、それから3日と経たないうちに、

男はずんぐりとした大鹿の皮袋をくくりつけている皮ひもをほどいた。開いた袋の口からは、粗い砂金と金塊が黄金色の流れとなってあふれ出てきた。男は金をおおよそ半分に分け、片方を毛布の切れはしに包んで突きでた岩棚の上に隠し、残りの半分は袋にもどした。(p. 132)

となる。きわめて印象的な場面で、半分は隠し、半分は袋にもどすあたりに人間の欲の深さがよく表われている。それでも彼の場合、体力の衰えに従って、やがて金をすべて捨ててしまう。そしてこのことは、「ビルは、そこで俺を待っていてくれるだろう」(p. 121)との強い期待感とともに、生命を長らえる原動力となる。ところが、

男は、体を引きずっていったもう1人の人間の足跡をつけたが、まもなくその跡も終わりとなった——しゃぶり取られたばかりの骨が数本あって、その水苔には多くの狼の足跡がついていた。自分のと対になったずんぐりとした大鹿の皮袋を見たが、鋭い歯で引き裂かれていた。男は、それを捨いあげてみた。もっとも、か弱い指には荷が重すぎると言ってもいいぐらいだったが。ビルのやつ、死ぬまでこれを離さなかったんだ。ハッ！ ハッ！ 男は、そんなふうには笑ってやりたかった。(p. 143)

と、主人公を置いてきぼりにした男であり、最後まで金を手放せなかったビルとは、好対照をなしている。

そんな主人公1人の単調な世界を、多数の脇役が躍動感をもって支える。トナカイ、岩ライチョウ、トカナイの群れ、キツネ、ミノウ、狼、ライチョウのひな、熊、狼たち、そして病気の狼と、物語の進行をほとんど中だるみさせることがない。まさにさまざまな生の有りようを手を変え品を変えて描きわけた、ロンドンの極北ものなかでも究極の一篇とも呼べる仕上がりを見せている。

もう1点、極北ものにも顔をのぞかせる文明批評に触れておきたい。「生命にしがみついて」においては、文明・人間の<sup>ゴールド</sup>金への執着・愚かさの象徴ともいえる「ずんぐりとした大鹿の皮袋」が読者に強いインパクトを与えるが、ほかにも時計、マッチ、ナイフ、ライフル銃、毛布、バケツといった文明の利器が——しかも、それらの無力さばかりが——目につく。すでに見た時計と同様、67本あるマッチの数を3度も数えなおす姿（「焚き火」では「70本の硫黄マッチが、一度にパッと燃えあがった！」(p. 197)）、「弾丸の入っていない銃」(p. 123)、空腹による体力不足とあってはまともに使いこなせないブリキのバケツや猟刀などは、いずれもあまり役には立たず、荒涼たる極北の大地・大自然を前にしては手も足も出せないことを物語っている。「老人たちの結束」には「ベニヤ板のようにうすい文明」(p. 69)という表現が明確に見てとれるし、さらには同作品の

征服した民族に法を課し、それに従わせるのが、陸と海で略奪をくり返すアングロ・サクソン民族のやり方で、ときにその法は、情け容赦もない。(p. 54)

『白人によい物、わしらにはよくない』（p.71）

などからも、作者の別の文明観や人種観までうかがうことができる。それよりも何よりも「極北の地にて」の冒頭の2節を読めばいい。頭でっかちで体力・適応力に乏しい虚弱な現代文明人に対して極北の大自然に向かう際の心得を環境と絡めてあれこれと述べている。いい加減な向きあい方などもってのほかだと戒めるのである。さらにはほかにも、ロンドン独自の文明批評眼が鋭く、のぞく作品がある。「極北のオデッセー」は、ナース（酋長）が妻のアンガを諸国に捜し歩く壮大且つ気の遠くなるような幾千里もの長の旅を扱った作品だが、黄金亡者たちの成れの果てが抜かりなく描きこまれてある。

「すると、谷底には誰かが山から投げ下ろした丸木で建てたらしい小屋がありました。とっても古い小屋でした。というのは、何人かの人間がそれぞれ違った時に独りで死んでいましたし、そこにある白樺の皮のきれはしに、その人間たちの臨終の言葉と呪いが書いてあるのが読みとれたからです。1人の人間は壊血病で死んでいましたし、もう1人の人間は連れの者から最後の食糧と火薬を奪い取られて逃げられてしまったのです。またもう1人はつるつる頭のオオグマに躰を引き裂かれていました。その次の人間は、獲物を求めたまま飢えて死んでしまったのですが、こうして、彼等はみんな金を見捨てるのが嫌で、金を傍に置いたままそれぞれの死に方をしたのです。そして彼等の集めた役に立たない金は、<sup>23)</sup>小屋の床をまるで夢のように黄色く照らしていました。〈傍点引用者〉

これなどは、上に見た「生命にしがみついて」のビルの、さらにはあの『野性の呼び声』の愛の主人ソーントンの、壮烈な最期と運動するものであり、ロンドンの極北ものには概してこうした文明批評をうかがうことができるのである。

ロンドンが揶揄した文明世界は、100年以上も経たわれわれの現代文明世界にも当てはまるだろう。劇作家の木下順二は、

便利さやスマートさや楽しさのただ中に生きている現在のわれわれからは、何かが失せて欠けてしまっている、私は感じないわけにはいかない。<sup>24)</sup>

と書き、その「何か」を「素朴さ、野蛮さ、粗野」という言葉で言いかえている。極北の世界とは雲泥の差があるかも知れないが、同じ線上にあるものではあるだろう。現代文明が利便さの追求に狂奔すればするほど、ロンドンの描いた極北の世界は遠のく。それどころか今や、地球の存続自体を危うくする現代文明の破壊性・自滅性が取り沙汰され、由々しき事態が生じはじめているのである。

#### IV

ロンドンは晩年に『赤死病』（*The Scarlet Plague*, 1915）という人類終焉の物語を出したが、これを論じた際に筆者は、「地球規模でいつ何が起こっても不思議ではない文明の脆さ・あっけな

さを、大きな視座で捉えてみせたこと<sup>25)</sup>」を指摘した。17歳のアザラシ狩りを皮切りに後半生にわたって世界各地に赴き、とりわけその内情に通じたことで、彼の批評眼・文明観はしたたかに養われた。クロンダイクのゴールド・ラッシュは、アザラシ狩り（1893）、アメリカ大陸放浪（1894）に次いで外界に踏みだした3番めの大きな体験であった。その後も、英国の首都の貧民街イースト・エンド潜入（1902）、日露戦争の従軍記者（1904）、『スナーク』号による一大航海（1907-8）等々、彼はまさに地球を駆けめぐったのだった。

本章では、極北ものに写しとられた世界を現代文明と気温——とりわけ地球温暖化——の問題に引き寄せて考察してみたい。極北ものは、何といても極寒の世界が圧倒的に多い。しかし、短い春や夏もある。「マーカス・オブライエンの行方」では7月下旬のことで、

6時間もあいた、何千という蚊が彼を食い物にしていたのである。そして蚊の恩知らずな毒が、顔をとてつもなく腫れあがらせていた。顔の細長い切れ目をどうにか開いて、まわりをのぞきこむには、大変な努力を要した。たまたま手を動かしてみても、痛みがはした。そちらのほうに目を向けてみたが、それが自分の手とは思えなかった。蚊の毒ではちきれんばかりだ。（p.171）

とある。その他「極北の地にて」や「生の掟」にも蚊が顔を出す。極北のわずか2、3ヵ月ほどの短い夏にも蚊が発生することを知って、極地を知らない者は驚くが、1年の大半は氷と雪に閉ざされ、Ⅱ章で見た極寒（零下50～60度）にも舌を巻く。人間が快適に暮らせる気温の幅は、やはりたかだかセ氏25～15度のわずか10度前後であろう。文明の温室に浸りきっているわれわれの場合は、なおさらである。『アメリカ浮浪記』（*The Road*, 1907）の「夜を走るルンペンたち」（“Hoboes That Pass in the Night”）の中でもロンドンは、アイオワ州「カウンスル・ブラッフスの巡回酒場でスウェーデン人と過ごしたあの夜ほどつらい野営をし、みじめな夜を過ごしたことは断じてない<sup>26)</sup>」と言いきり、

まず第1に、その建物は大地に固定されていなかったから、床に多数のすき間をさらし、その間を風がピューピュー吹きぬけるという次第だ。第2に、カウンターには何1つなかった。つまり、2人が体を暖めてみじめさを忘れられる瓶入りの火酒がなかったのだ。毛布がなく、ずぶ濡れの服を着たままで眠ろうとした。私はカウンターの下に転がり、スウェーデン人はテーブルの下に転がってみた。ところが、床に穴や裂け目があって転がれず、半時間ほど経つと、私はカウンターの上にはい上がった。それから少しして、スウェーデン人はテーブルの上にはい上がった。

そしてそのままぶるぶる震えながら、2人は早く夜が明けるようにと祈った。私などは、もうこれ以上耐えられないというところまで震え、とうとう震えている筋肉がぐたくたくなって、ものすごく痛いだけであった。スウェーデン人はうめき苦しみ、ひっきりなしに歯をガタガタ言わせながら、つぶやくのだった。「もうこりごりだ、もうこりごりだ」彼は、この文句をくり返し、絶え間なく、数えきれないほどつぶやいた。さらにうたた寝をしながらも、同じことをつぶやき続けたのだった。<sup>27)</sup>

と、長々と説明を加えている。この時の気温がいったい何度だったのかは明記されていないが、極北のそれとは比較にならないだろう。要するに、人間——とりわけ現代文明人——が耐え得る気温幅など知れたものなのだ。Ⅱ章で見た通り、「ある限られた暑さ寒さの範囲内でしか生きら

れない人間」(p.179)なのである。

ところが今日、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を始めとする温室効果ガスによる地球温暖化問題が、大きく浮上してきている。ここ3、4年の目立った関連記事<sup>28)</sup>の見出しだけでも拾っておく。

- \* 温暖化続けば 海面上昇 消える砂浜（三村信男・茨城大工学部教授ら、1997年4月20日）
  - \* 温暖化 50年後3度上昇すれば 高齢者を直撃／猛暑で死者1割増（国立環境研究所、1997年7月6日）
  - \* 冬日激減／地球温暖化——都市化が原因（気象庁、1997年12月7日）
  - \* 地球の森 4割枯死／温帯や亜寒帯を直撃（東京工大・国立環境研、1998年6月13日）
  - \* アラスカ先住民／氷薄く狩り困難（グリーンピース米国支部、1998年8月14日）
  - \* 地球温暖化防止を／北極の動物ピンチ（グリーンピース、1998年11月10日）
  - \* 森林が危機／世界20地域（世界自然保護基金、1998年12月6日）
  - \* 地球温暖化 影響深刻なマーシャル諸島／水没の危機 京で訴え（マーシャル諸島共和国、1999年3月8日）
  - \* 北極点の氷がない！／温暖化の加速警告（ワールド・ウォッチ、2000年8月30日）
  - \* 地球温暖化が問うもの(1)薄れる関心に危機感（加藤三郎・環境文明研究所長、2000年9月4日）
  - \* 同上(2)水資源への影響甚大（住明正・東大教授、2000年9月5日）
  - \* 異常気象で自然災害拡大／約30年で4倍強（世界自然保護基金、2000年11月4日）
  - \* Too Hot To Handle?（*Newsweek*, November 13, 2000）
  - \* 温室効果ガス 先進国全体6.4%減／日・米・西欧では7%増（ハーグ会議、2000年11月20日）
  - \* どうなる京都議定書——ハーグ会議から〉上〈（2000年11月27日）
  - \* 同上〉中〈（2000年11月28日）
  - \* 同上〉下〈（2000年11月29日）
  - \* The Mercury's Rising（*Newsweek*, December 4, 2000）
  - \* 気温、最高で5.8度上昇——1990-2100年（気候変動に関する政府間パネル、2001年1月22日）
- 〈英文以外の（ ）内の年月日は、いずれも京都新聞より〉

それぞれにかなりのスペースを割いており、事の重大さが十二分にわかる。ロンドンがクロングイクに旅し、あるいはいくつもの極北ものを書いていた当時であって、無論事態はここまで深刻ではなかった。彼が写しとった極北の大自然の1コマ1コマは、むしろ人間に立ちはだかる驚嘆・恐怖・畏怖の対象ですらあった。久しく人間は、大自然の一部であり続けてきたのである。それが今日、南極の氷山の崩落をも含め両者の関係は逆転の様相を呈し、無謀にも人間が大自然を左右するところまで来てしまった。すなわち、極北ものに描かれ何万年も続けてきた常態に異変を生じさせはじめたのだ。恐怖であり続けることが常態だったのに、である。その意味においてロンドンの極北ものは、今日においてこそ痛烈な文明批判たり得るわけである。

## V

つねに現地へ赴き、そこで見聞した自信からわき出るような筆づかいで数々の佳作を生みだしたロンドンだが、本稿では彼の職業作家としての原点ともいえる極北もののうち、短篇群に焦点

を絞り考察してきた。さまざまな人間模様もさることながら、そうした見聞は大自然描写の筆の運びにも随所に細やかに活かされている。

日ごと、いかにも寒々としてごつごつした山々を、雪がだんだんおおいつつあったし、冷たい風が吹きすさび、その風は最初みぞれを、さらにはびしょびしょの水を、ついには雪を伴ってきたからである。また、流れのゆるむところや止まるところでは、氷が張りはじめ、そしてそれは見る間に厚みを増していった。（「千ダース」, p.86）

前章で見たように地球環境に対して暴虐の限りを尽くしてきた現代文明人（とりわけ先進諸国）は、果たしてロンドンが書き残したこうした大自然の繊細な常態を守り残していけるのだろうか。たとえ

「開発」を善として無節操に開発し続けてきた時代を終えて、先進国では1980年代には、自然といかに共存していくかが大きなテーマになって、「環境アセス」が真剣に検討され取り入れられてきました。<sup>29)</sup>

としても、上に見た諸記事にも明らかなように、深刻な事態は決して改善されているどころか、むしろ悪化の一途を辿っているようなのである。

詩人の荒川洋治が、8年の滞日ののち帰国前に日本滞在記を出版した内モンゴルの詩人のことを、岩波の『図書』（第616号）で紹介していて、筆者もそれを手に入れ、一気に読んだ。<sup>30)</sup>

（モンゴルでは）10月から川や湖の表面は厚く凍りはじめ、痛むほど寒い。長い冬がやってくる。……零下30度にもなる外の寒さの中で、僕は楽しく遊びまわった。……（p.15）

日本のどこへ行っても、時計がよく見られる。……僕は子どもの時、太陽と星と風で時間を計り、毎日変わらぬ日々を送った。……（p.26, p.27）

モンゴル人の顔からは永遠は見られるが、瞬間はほとんど見られない。（p.28）

永遠の天の力を信じ、シャーマンの予言を信じた。（p.57）

大自然の営みという自動装置の中で、生き物は目に見えない手によって他動的に動かされている。（p.67）  
〈傍点いずれも引用者〉

内モンゴル自治区といえ、北緯45度前後、日本でいえば北海道の北端・稚内から網走のあたりになろうか。北緯65度のクロンダイク地方とはあまり比較にならないかも知れないが、それでも傍点を打ったあたりは、ロンドンの極北ものに見たものと不思議にも響きあう。

となると、かつて大橋吉之輔が書いていた一文「ジャック・ロンドンの魅力」（『現代アメリカ文学全集』14, 月報第13号, 荒地出版社, 1958）の中の、「いつの世にもかわらぬ人間という動物の本性が、ムキダシにされているところにロンドンの魅力はある」はうなずけるとして、「アメリカ文学にも、こんなに異常で、こんなに面白い作品があるのだという証左に、ロンドンをもって



こいの作家なのだろう」(傍点引用者)の「異常」という表現に、どうにも引っかかってしまう。40年以上も前のわが国にあってはそのように受けとめられたとしてもやむを得まいが、「異常」とは「普通またはいつもと違って、どこか狂っていること」(岩波国語辞典)である。今日の地球環境の危機的状況を考えあわせるとき、ロンドンの写しとった極北の世界(特に大自然のありよう)こそは、異常どころか、むしろ常態なのであって、生態系のバランスを維持していくうえで絶対不可欠のものなのだ。地球や人類の危急存亡が云々されればされるほど、ロンドンの極北もの短篇群は強烈なメッセージを放ちつづけることであろう。

- 1) 拙稿「ジャック・ロンドン:その習作期に於ける作品についての一考察」(『現代英語文学研究』第3号, 1975), pp. 42-55および「“Story of a Typhoon Off the Coast of Japan”再考——The *Morning Call*を巡って」(『現代英語文学研究』第7号, 1981), pp. 54-71を参照。
- 2) Russ Kingman, *A Pictorial Life of Jack London* (New York: Crown Publishers, 1979), pp. 69-70.
- 3) Jack C. Fisher, *Lead Pencil Miner* (California: Alamar Books of La Jolla, 1998), vii.
- 4) Russ Kingman, *op. cit.*, p. 69. 邦訳は, 上掲拙訳書, p. 122.
- 5) *Ibid.*, p. 80. 邦訳は, 上掲拙訳書, p. 141.
- 6) Elaine Slivinski Lisandrelli, *Jack London—A Writer’s Adventurous Life* (New Jersey: Enslow Publishers, 1999), p. 56.
- 7) *Ibid.*, p. 52.
- 8) 新田次郎著『アラスカ物語』(新潮社, 1974), p. 216.
- 9) さらに詳細は, 拙訳書(共訳)『極北の地にて』(〔1996〕, 新樹社, 1998)の「訳者あとがき」参照。なお, 本書の各短篇からの引用は, 引用文のあとにページ数をもって示すこととする。
- 10) Daniel Dyer, *Jack London: A Biography* (New York: Scholastic Press, 1997), p. 94.
- 11) Jack London, “An Odyssey of the North” (London: Arco Publications, 1970), p. 148.
- 12) Jack London, *White Fang* (本の友社復刻版 *THE WORKS OF JACK LONDON*, Vol. 8, 1989), p. 10.
- 13) Jack London, “The White Silence” (London: Arco Publications, 1970), p. 17. 邦訳は, 『現代アメリカ文学全集』14(荒地出版社, 1958), p. 8.
- 14) *Ibid.*, p. 25. 邦訳は, 同上, p. 15.
- 15) Jack London, *The God of His Fathers* (London: Arco Publications, 1967), p. 109. 邦訳は, 同上, pp. 180-1.
- 16) Jack London, “House Keeping in the Klondike” (*Jack London Foundation Newsletter*, Vol. 12, No. 1, 2000), p. 2.
- 17) 中野孝次「老子の時間, 道元の時間」(岩波書店『図書』第615号, 2000), pp. 4-5.
- 18) 岡崎清「数の恐怖——ジャック・ロンドンの短編小説に関する一考察」(日本ジャック・ロンドン協会第8回年次大会——中京大学, 2000年6月17日)
- 19) 『小学館ランダムハウス英和大辞典』第2版(小学館, 1994), p. 2481.
- 20) E. Kirn & P. Hartmann, *A Reading Skills / Interactions Two*, 3rd Edition (The McGraw-Hill Companies, Inc., 1997), pp. 220-2.
- 21) Jack London, “The Story of Keesh” (本の友社復刻版 *THE WORKS OF JACK LONDON*, Vol. 10, 1989), p. 107. 邦訳は, 前掲書『現代アメリカ文学全集』14, p. 225.
- 22) Jack London, “Lost Face” (*Lost Face*, New York: The Macmillan Co., 1910), p. 15. 邦訳は, 拙訳書(共訳)『アメリカ残酷物語』(新樹社, 1999), p. 102.

- 23) Jack London, "An Odyssey of the North" (London: Arco Publications, 1970), pp. 183-4. 邦訳は、前掲書『現代アメリカ文学全集』14, p. 59.
- 24) 京都新聞, 2000年8月17日, p. 12.
- 25) 拙稿「J. London, *The Scarlet Plague*——人類終焉の物語——」（『立命館経済学』第48巻・第5号, 1999), p. 222.
- 26) Jack London, *The Road* (本の友社復刻版 *THE WORKS OF JACK LONDON*, Vol. 11, 1989), p. 149. 邦訳は、拙訳書『アメリカ浮浪記』（新樹社, 1992), p. 158.
- 27) *Ibid.*, pp. 149-150. 邦訳は、同上, pp. 158-9.
- 28) *Newsweek* のものを除きいずれも京都新聞より。
- 29) 高橋ユリカ『誰のための公共事業か』（岩波書店「岩波ブックレット」No. 516, 2000), p. 60.
- 30) ボヤンヒシング著『懐情の原形——ナラン（日本）への置き手紙』（英治出版, 2000）